

## 研究経過報告

石田 勢津子

### I 自己学習システムに関する研究

1984年度は、「自己学習システムのメカニズムに関する研究」と題した課題で、科学研究費を受け、2つの実験を実施することができた。これは、自己評価、自己強化を含む自己学習システムを教授—学習場面に、いかに有効に機能させるかについての一連の研究の一つである。マイコン制御の実験で、その装置の作製にかなりの時間を費したが、現在、実験結果の整理も終え、論文としてまとめているところである。

また、外的達成規準についての情報が自己評価にどのような影響を与えるか、自己学習システムにかかわる諸々の要因をとり上げた実験を行った。その結果は、本年度の紀要に掲載されている。

### II 共同研究

梶田助教授、大学院の伊藤篤氏とともに、「個人レベ

ルの学習・指導論 (Personal Learning and Teaching Theory)」に関する研究を、昨年度から引き続き行っている。

本年度は、愛知県教育センターの教科研究部との共同研究のかたちで、県下の教諭を対象として、「個人レベルの指導論 (PTT)」の調査を行った。小学校、中学校の教師たちのもつ指導に対する個人的な信念はどのようなものであるのか、その結果については、本年度の紀要に掲載されている。

また、これと同時にいくつかの調査も実施し、現在、その結果の整理に追われている。できるだけ早い時期に論文としてまとめていきたい。

最後に、この略して「PLATT」と呼ぶ一連の研究は、今後も、梶田助教授を中心に、教育への実用性という視点から、研究を押し進めていく予定である。

## 研究経過報告 (1983年秋から1985年夏まで)

池田 博和

### 1. 青年期の病理と心理臨床

①1984年7月に村上英治先生は御還暦をむかえられたが、このお祝いの日にあわせて、「生きること・かかわること」と題する記念論文集を編集、刊行することができた。この中では特定の症状選択のできない青年期危機の症例をとりあげ、そのケース、およびその家族とのかかわりについて述べた。この論文では心理臨床家と相手とのかかわりに重点がおかれ、必ずしも次の点は強調されはしなかったけれども、ここでの文脈からすれば、こうした明確な症状が取れないケースこそが、「生成の停滞」という青年期危機症候群の本質的病態を露呈する中核群に他ならないのではないかということ、および精神分裂病との連続性の問題が重要な視点になっている。

②昨年度の本紀要には、刈谷病院の服部孝子と共同で「ある精神分裂病者の心理療法過程」と題する論文を執筆した。ここではあるひとりの分裂病者の心理療法過程に即して、精神分裂病者の基本的存在様式の問題と心理療法論についての考察を行なったが、分裂病の基本的な

ありようを「人間学的均衡」の視点から分析することは、私の中ではすでに自明の事柄になってはいたものの、これまで正面切ってこれを発表する場はあまりなかったため、貴重な機会となった。この視点自体は先人の業績によるところが多く、まったく新しい知見とはいえないけれども、これを心理療法論に直結させたところに意味があると思う。とりわけ何人かの経験深い臨床家や精神科医から、この点についてはかなり高い評価が得られたことは、望外の喜びとするところであった。

③この他、まる5年にわたって取り組んできた重篤な青春期痩せ症のケースや、まる7年になる離人症を主とする青年期危機のケースは、臨床的にようやく終結への見通しが立ちそうな気配になってきているし、学生相談として担当している典型的な Student Apathy のケースもいよいよ展開期を迎えつつある。こうした臨床経験をとおして、そろそろ青年期危機症候群の病理と心理療法についての体系化をしていかななくてはならないと感じているところである。